

「成熟したボランティア」に向けて

——「もちつ・もたれつ」のススメ——

徳 田 剛

キーワード：ボランティア、阪神・淡路大震災、贈与、stranger

1. 「見知らぬ人びとのニーズ」にどう応えるか？

私たちは、日々の生活の中で「困ったな」と感じるとき、とくに「これは独りでは手に負えない」という事態に陥ったときに、他の人と支えあえるような「つながり」をどの程度もっているでしょうか。思い浮かぶのは、家族、友人、職場の同僚、ご近所さん、あるいはメルトモ…といったあたりが候補として浮かんでいますが、いずれも頼めなくもないけど頼みづらい、あるいは、そもそもそのように助け合えるような相手はいない、という人も少なくないかもしれません。

では、「困った」時には「お上^{かみ}」（国や地方自治体など）に頼るのはどうかというと、これまた非常に心もとない。「緊縮財政」と「自己責任」の一点張りで、どうも公的扶助全般が貸し渋りならぬ「出し渋り」の状態のようです。社会全体のセーフティネットが弱体化していく中で、多くの人ができる限りは独力で、やむをえない時には個人的な伝手^{つて}や公的扶助の活用でどうにかしのぎながら日々を暮らしている、といったあたりが実情でしょうか。

イギリスの政治思想家であるM・イグナティエフは、現代社会の課題は「見知らぬ人びとのニーズ（the needs of strangers）」にいかに応えるかにある（Ignatieff 1984=1999：19）、と述べています。彼のアパートメントの近くで開かれた「のみの市」で品定めするお年寄りたち。明らかに年金生活者であり、単身または高齢夫婦世帯であると思われる彼らとは直接の面識もつながりもないけれども、福祉国家の制度の網の目を通じてつながっている。「わたしたちが郵便局で一緒に列に並ぶとき、老人たちが年金小切手を現金化すると同時にわたしの所得のごく一部が、国家の数知れない毛細血管を通じてかれらのポケットのなかに移転される」（ibid.：15）というわけです。自分の収入の一部は確実に彼らの財布に収まっている。しかし、そのことをお互いに意識していない。このような関係は気楽でよいが、それはお互いに対する無関心な態度を育て、人びとをばらばらにしてしまうことでもあります。

家族や地域社会といった旧来の「支えあい」の関係から切り離されてしまっている人が増えています。そのような人々にとっては、国や地方行政による公的支援のシステムは、たしかに

頼りにならなくなってきてはいるけれども、依然としてそれなしには立ち行かないものです。これらは、お互いに見知らぬ者どうしを「支えあい」の関係へと結び付ける巨大な社会的装置ですが、それによって満たされるのは主に「衣・食・住、教育そして雇用」(ibid. : 20)などの「生存」に関わるニーズです。しかしイグナティエフによれば、人間が人間らしく生きていくためには、他者からの一人の人間としての承認、つまり「友愛、愛情、帰属感、尊厳、そして尊敬の念」といった「尊厳」に関わるニーズの充足も不可欠です。人はパンのみで生きるにあらず、誰か他の人から愛されることも必要だ、ということです。

仮に生活保護や年金などの公的扶助を通じて生活を支えるのに十分な支援が与えられ、「生存」のニーズがそれなりに満たされたとしても、それをもって「尊厳」のニーズもまた満たされたというわけにはいきません。行政の姿勢は「あなた一人を特別扱いするわけにはいきません」というものであって、その中で「特別扱い」をしてもらうためには、(みなさんの税金を使って)この「私」を支援することがいかに正当であるか、あるいは「私」がいかに支援なしには生きていけないようなじりじりした境遇にあるかを必死でアピールしなければなりません。「困っている」人が公的支援を受ける際には、しばしばこのような「尊厳のニーズ」の断念を伴います。イグナティエフは次のように述べています。

「貧しい高齢者に年金を給付し医療介護を提供することはかれらが自尊心と尊厳を保つうえでの必要条件であるが、十分条件ではないだろう。重要なのは、そうした給付がなされる際のマナーであり、そうした給付の道徳的根拠なのだ。つまり、わたしの住まいの戸口の見知らぬ人びとが身の上話をするとき、ソーシャルワーカーの人たちがそれに耳を傾けてくれるかどうか、集合住宅の急な階段を運び降ろすときに救急隊員の人たちがかれらを激しく揺さぶることがないように気を配ってくれるかどうか、かれらが病院で独りきりで怯えているときに看護婦の人たちが付き添ってしてくれるかどうか、それが問題なのだ。尊敬と尊厳はこのような身振りによってこそ授けられる。こうした身振りは人間的な技の問題である部分があまりにも多すぎて、融通のきかない行政の定型業務にはなじまないのだ。」(ibid. : 25、傍点は引用者)

さて、ここでボランティアの出番です。「ボランティア」というつながり方は、このような「見知らぬ人たちのニーズ」に応えるための手法の一つとして、かなり高いポテンシャルを秘めているように思います。ボランティアは「匿名性の高い、大量の人的資源が協力しあい助け合うための仕掛け」(山下・菅2002 : 258-259)であって、しかも行政や地域社会の目が届きにくい、さりとて家族だけでは支えきれないような、諸々の「生存」のニーズを満たすことができるし、ボランティアによる支援は自らの意思で、自らのリソースを提供しているわけですから、「この人をなんとしても支えたい」という「特別扱い」も問題はない。つまり「尊厳」のニーズの充足に関わるのが許される存在でもあります。

2. ボランティアの「魅力」と「危うさ」

とりわけ1995年の阪神・淡路大震災以降、相手が誰であれ、困っている人に対して「できればボランティアとして支援したい」と考える人が飛躍的に増えてきたように思います。老若男女問わず、多くの人びとが「ボランティアするのは当たり前」という感覚で活動するようになってきており、参加することによって見ず知らずの他者とのつながりを作る際のハードルを引き下げることができるのが、ボランティアの「魅力」の一つだといえます。

もう一つ評価してよい点は、近年のボランティアをめぐる言説が、自分の能力、時間、お金などの一部をボランティア活動に投入することで自身の成長ややりがいを得られますよ、というロジックでボランティアの意義を説明するようになってきていることです。ともすれば、「自分のため」という動機ではボランティアとは呼べない、という批判ももちろんあると思いますが、社会的正義や自己犠牲の精神を起点にしてボランティアの意義を訴えても、近頃はどうもピンと来ない。「やりたいからやる」「やってみたら充実していてよかった」というところからまずは始めてはどうか、ということであれば、「それくらいなら、いっちょやってみるか」となる。筆者の意見としては、このような利己的な動機による「投資行動」の先が他者への支援行動につながっているという図式は、特に今日の若い人の感覚にはフィットしていて、「入口」としてはよいと思います。

とりわけ1980年代あたりから、「私生活主義」「消費中心主義」といいますか、まずは自分(たち)の生活を豊かで快適で、より充実したものにするという発想から物事が考えられるようになりました。中山淳雄によれば、ちょうどその80年代の半ばごろにボランティア観にも大きな変化があって、その一つにボランティアの強調点が「正しさから楽しさへ」と移行してきている(中山2007: 155-157)とのことですが、これはおそらく、そうした人々の基本的な考え方の変化に合わせて、ボランティアのロジックも変わってきたということではないかと考えられます。

しかし同時に、ボランティアを通じた人間関係の「危うさ」への目配りも必要です。「勇気を出して、初めて現場にやって来た。たいしたことはしていないけど、人にほめられ、やりがいを感じた。楽しい。もっとがんばりたい」。こうしたサイクルの中で、ボランティア従事者の中に「がんばりすぎ」や「気負い」が生じることがあります。

ボランティアの「がんばり」にも2種類があります。「自分のやりたいこと」をやるのに夢中となり、スタンドプレイでまわりに迷惑をかけたり、こんなにがんばっているのになぜ感謝されないのだ?と不平をもらしたりする「一人よがりボランティア」。こういう利己的な動機の強すぎるタイプについては、活動仲間も支援対象者も「困ったな」という感じですが、逆に、「困っている人を助けたい」と利他的・愛他的な気持ちの強すぎる人もまた、よくない結果を生み出してしまふことがあります。

次節以降で詳しく見ますが、ボランティアは、ある個人が別の個人に「何かを贈る」行為で

す。「贈られる側」である支援対象者にとって、あまりに一生懸命に贈り続けられると、心の中に「負い目」が蓄積してしまう、あるいは「贈り物」を受けることに慣れてしまって依存気質が増したり、ボランティアを道具のように使いまわしたりするような事態を招いてしまう。このようにボランティアの「気負い」は、支援を受けている人の自立への意欲を削いでしまうだけでなく、ボランティア自身の「バーンアウト」の原因にもなります。

本稿では、「見知らぬ者どうしが支えあう」ための関係原理であるボランティアの、こうした「魅力」と「危うさ」の両面を視野に入れながら、どうすればボランティアの「気負い」や支援対象者の「負い目」をなるべく軽減させながら、この「支えあい」の関係を継続・発展させることができるのかについて、考えてみたいと思います。

3. 「贈り物」としてのボランティア ―― 贈与行為の非対称性

ボランティアの捉え方については、多くの論者が、「自発性」「無償性」「社会性（あるいは利他性）」といった3つの原則に従って説明してきましたが、これらはどちらかというと、ボランティアを「する」側の個人や団体がふまえておくべき行動指針という側面が強いと思います。しかし本稿では、ボランティアを「する」側と「される」側の関係の視点から、ボランティアの特色を考えます。

先に触れたように、ボランティアはある個人が別の個人に対して「贈り物」をする行為と見なすことができます。つまり、ボランティアをする人はなにかを「贈る人」であり、相手はその何かを「受け取る人」という位置づけが可能です。岡崎宏樹は、M・モースの贈与論を参照しながら、このボランティアの「魅力」と「危うさ」の特徴を浮き彫りにしています。岡崎によると、「ボランティア活動は、モノ、サービス、エネルギーなどを無償で自発的に贈与するところからはじまる」のであり、「幸運な場合にはそこに笑顔や感謝が送られ、分かちあいの関係が生まれる」が、時には「不適切な贈与が受け手に不快や苦痛を与えることもある」（岡崎2005：21）。本節の問題関心において重要なのは、後者の側面、つまりボランティア行為が相手にとってマイナスの効果を生むことがあるとすれば、それはどのようにして起こるのかという点です。

これについては、贈与行為の「非対称性」という視点から説明できます。つまり贈与行為は、贈る者に対して受け取る者よりも優位な地位を与えるということ、さらに言えば、両者の間には一定の権力関係、すなわち贈られる者が贈る者に頭が上がらないような状態ができやすいということです。この点についてしばしば参照されるのが、北米の先住民の儀礼である「ポトラッチ」の例です。そこでは、ある部族社会の首長の座をめぐる、どちらがより多く贈与できるかを候補者どうしが競いあいます。「彼らは互いに、これみよがしに気前よく大量の贈り物を贈ることで相手を圧倒しようとする。贈与の応酬はしだいにエスカレートし、どちらかの富が底をついて返礼できなくなるまで続く」（ibid.：23）。そして、贈与ができなくなった者は従属

者の地位に貶められるというわけです。

この知見に基づけば、何らかの事情で「困っている人」に贈り物をしようとするボランティアは、望むと望まざるとにかかわらず、自らを支援対象者よりも優位な位置に置くことになります。とりわけ、支援対象者の困窮の度合いがはなはだしく、ボランティアに「助けてもらえばなし」の状態であるときには、ボランティアの関係が継続していく中で、何がしかに支配され、受動的な存在におかれているような「肩身の狭い」思いを感じることがあります。「助けられればなしはきつい」という支援対象者のつぶやきは、支援行為の自明性をゆるがせるために、ボランティアの側にも大きなショックを与えます（資料1）。

資料1 被災者の「負い目」とボランティアの反応（阪神・淡路大震災の事例より）

①『『あんだ、わかれへんのか、毎日すみません、ありがとうございます、言うてみい。1ヶ月で嫌になるで。半年たったら自己嫌悪や。1年もたったら、自殺したくなるで、ホンマ。』…Eさんは、自分のできる限りのことを『してあげていた』つもりだった。しかし、自分の行為が被災者の自尊心を傷つけ、逆にストレスを与えていたことを知り、非常に『ショックを受けた』という。』（西山2005：161）。

②「自立ということ、そして『ボランティア』たちが『助けすぎる』ということ。このやりとりでも、ぼくがやっていたことの本質を指摘されたと感じた。困っている人を助けることが『助けられすぎ』になるとまで思い至ることはほとんどなかった。そうなれば、『ボランティア』のすることがなくなってしまうから。」（原田2000：13）

このような被災者からの反応は、「困っている人を助けるのは当たり前」といった、ボランティアという行為の自明性が失われることを意味しますので、（そもそもボランティアをしてよかったのかという問いも含めて）いわば自らを「セルフ・モニタリング」する必要に迫られます。原田隆司は、「ボランティア活動に向き合うと、自分自身に疑問が生じる。それは相手との関係においてみえてくる自分の姿であり、自分の活動が相手にとってどのような意味で『効果的』なのかという疑問である」（原田2005：405）と述べていますが、それはこのような事情によるものです。

また金子郁容は、このようにボランティアに身を投じることで、「自分ですすんでとった行動の結果として自分自身が苦しい立場に立たされる」ようなボランティアの特性を「自発性のパラドクス」（金子1992：103-105）と呼んでいます。ボランティアが現場のやりとりの中でもまれて成長する。時にはトラブルやドロドロした人間関係も経験して、あれこれ自問自答しながら自らが鍛え上げられていく。結局は、それへの自己満足しかないけどそれはそれでいいし

仕方ないのだ、ということなのかもしれません。しかし、ボランティアを「する」側がそのように気持ちの整理をつけても、先に見たように、ひょっとして自分のボランティア行為は相手にとって重荷になってしまったのではないか、という疑いを完全に消すことはできません。とくに、ボランティアとその対象者がお互いに相手の気持ち（あるいは「尊厳」のニーズ）を気遣い、配慮しようとするほど、やりとりそのものが「重たく」なり、お互いに身動きが取れなくなってしまう。ここに、家族や友人との関係とは違った、ボランティアという関係原理に特有の「難しさ」があるように思います。

4. 「お返しボランティア」の効能

これまでの議論で、ボランティアという人間関係は、人を見知らぬ他者のニーズへと深く関与することを容易にするような「魅力」をもつとともに、相手への配慮がすれ違ってどんどん関係を重たくしてしまうような、関係の不安定性、非対称性という「危うさ」を含んでいることを見てきました。このような事態は、とりわけ「誰かを手助けしたい」「とにかくボランティアがしたい」という素朴な気持ちから行動を起こしたばかりの「ビギナー」が多かれ少なかれぶつかる壁といえるでしょうが、そこにボランティアの行動や考え方にちょっとした工夫や気配りを加味することで、ボランティアの「気負い」や支援対象者の「負い目」をいくらかは軽くすることができるのだ、ということを以下に論じたいと思います。

先に参照した「贈与としてのボランティア」の議論において、岡崎宏樹はモースがとりあげた未開社会の贈与の習慣の多くに、一方が他方に贈り物をした場合には、何らかの形で返礼義務が付随していることを指摘しています。B・マリノフスキーが記録したトロブリアンド諸島のクラ交換の例などはまさにそうですし、ニュージーランドのマオリ族の事例では、贈り物には霊的な力（ハウ）が宿っていて、贈り物を受け取ることで人はそのパワーを自らのものとしてすることができる。しかし、それをいつまでも手元にとどめておくとかえって持ち主に災いをもたらすために、その力を別の贈り物に宿らせて送り返さなければならないといえます（岡崎2005：21）。こうした返礼の義務付けは、おそらく贈与行為に伴う社会成員間の階層分化を抑制することによって集合生活を安定させ、人間関係を円滑にするための「知恵」であって、「もちつ・もたれつ」でちょうどいい按配なのだ、ということなのでしょう。

ボランティアの場合はどうでしょうか。一般的な考え方では、「自発的に無償で誰かのために働く」のがボランティアだとされますが、その行動原理を忠実かつ合理的に遂行すればするほど、「贈りっぱなし」になる恐れがあります。また、ボランティアの方が無償性原則を貫いて「全く何も受け取らなかった」とすると、相手方からすれば「していただいたこと（贈り物）へのお礼やお返し」をする機会が失われることにもなります。

このような「贈りっぱなしーもらいっぱなし」の不均衡な関係が最も生まれやすいのは、介護者と要介護者の立場がはっきりと分かれている福祉活動の現場かもしれません。木原孝久は、

介護サービスの受給者がしばしば「もらいっぱなし」の状態になっているということを、「心の貸借対照表のバランスが崩れている」状態として捉えています。

「ちょっと『おすそわけ』をいただいただけでも、借金がかさんだという意識が生まれる。ましてや、日々、おむつを交換されている人のバランスは、おそらく極端に崩れてしまっているはずだ。これではたまらない。なんとかバランスを取り戻さなくてはという必死の思いが『ボランティア欲求』を生み出すのだ。ところがそんな寝たきり高齢者のもとに『おばあちゃん、ボランティアをしてあげるからね』と善意の人が近づいてくる。それが本人にどれだけ悲惨な思いをさせることになるのか、ボランティアのほうは気づかない」（木原2005：20-21）

我々の日常的なやりとりにおいても、ここで指摘されているように、プレゼントであれ年賀状や電子メールであれ、何か贈り物をもらった後で「もらいっぱなし」にしておくのはどうも気持ちが落ち着かず、何らかの「お返し」ができてようやくホッとするという経験をよくします。同じことがボランティアの関係にもあるはずで、ボランティアによる支援の対象者は、たまたま今は「贈られる側」だけれどもいつかは「お返し」をしたいと思っていて、実際の現場においても人びとは一生懸命に「お礼」や「お返し」のリアクションをしています。（資料2）。

資料2 被災者からボランティアへの「お礼」や「お返し」の例

①被災者からの「過剰な」までの返礼

「僕が神戸の避難所で、あるおばあちゃんの孫とサッカーをして遊んだ時があった。すると、おばあちゃんがその孫に『遊んでくれてありがとうと言いなさい』と言うのです。僕としては、遊んであげたわけではなくて自分が遊びたいからしたことなのに、自分の本心が相手に伝わっていない。『本心は違うのに！』という何か歯がゆさを感じた。…でも、おばあちゃんにとってみれば、僕らの行動は『わざわざ遠くからきてもらって申し訳ない』という気持ちになるのは当然かなって思うけど……。」（福岡編1996：141）

②災害救援の「お返し」宣言

「先程、おにぎりを配りに行った時、見ず知らずの人に『今度もしあなたたちがこんな立場になったら絶対お返しするからな』と言ってくれたんです。それがすごく嬉しかったです。」（戸高編1995：43-44）

「今度関東で震災が起こったら、栃木に行ってやるで」（福岡編1996：162）

「この1月、神戸・阪神からのボランティアが入った但馬地域のある人が、神戸での報告会に出席し『大震災のとき何もしなかったのに、わたしたちは助けてもらった。なぜ10年前に

神戸に来てなかったのか自分を責めています』と涙声で語りかけ『もし次に全国どこでも大災害があったら私も家族も必ず行きます』と言い切る姿を見て、一緒にこみ上げるものを感じたが、何がここまで言わせるのだろうか、これまた不思議な感じがした。」(山口2004: 3-4)

③学びの場の提供 ――「何もしてやれんけど、よう勉強していってや！」

「遠くからかかってくる電話の主がみんな『何が欲しい』と一様に聞く。具体的に被災の様子を喋って答えとすると、『なにもできないけど頑張って！』と締め括りにかかってくる。最初は『なにを頑張ればいいのか、そっちでおきたらわかるで』と腹も立ったのだが、本当に困難な状況の中で自立を目指す被災者が『よう勉強して帰って役立ててや』とボランティアに語る姿やボランティアが逆に『反対に元気づけられた』という感想を述べたりしているのを知って、私もたとえば『そっちでもおきたら大変やから、棚が倒れても下敷きにならん場所で寝るようにしなよ』などと被災経験に基づいてアドバイスすることにした。すると、『わかった、本棚留めて、上のもの整理するわ』といった応答が返ってき、こっちからのストロークが相手に達したような気にもなるし、自分の被災体験が少しは役立ったような気持ちにもなる。こんなことを何回か続けていると、だんだんと『地震はこれっきり、他所でもおきてほしくない』と思えてくるようになった。」(藤田1996: 5-6)

①の例では、“無償で気軽にボランティアをしたのであって、特にお礼を言われるほどのことではない”と考えている学生ボランティアさんの心情と、“せめてお礼くらいはきちりしたい”というおばあちゃんの心情がうまくかみ合っていない様子が伺えます。特におばあちゃんのかたくなな応答には、きちんとお礼を言うのは「被災者といえども一人の人間としての礼儀である」といった、支援を受ける側の自尊心の発露が垣間見えます。

興味深いのは②の災害救援の「お返し宣言」です。駆けつけてくれた災害ボランティアたちにただ「お礼」を言うだけではなくて、今回助けてもらったことの「借り」に対して、「いつかどこかで別の困っている人がいたら必ずお返しするからね！」という「約束手形」を切ることで、ボランティアの機先を制しているのです。そして、このような約束は実際に「被災地から別の被災地へ」の「お返しボランティア」のアクションへとつながっていきます。

「かつての被災者がボランティアをする側になる」ことの決定的に重要な意義は、自らの体験に照らして「現地では何が必要か」「何に困りそうか」を即座に判断して、「早期に、質の高い」支援を届けることができる点にあります。阪神・淡路大震災のときも、大量かつ無秩序な形で送られてきた支援物資が現地に大きな負担をかけたのに対し、島原の雲仙普賢岳で被害を受けた地域からきたボランティアは、仕分けをきちんとして、しかも配布するためのスタッフも帯同する形で被災地へ届けるなど、実に行き届いたものであったようです(草地・松本2001:

107)。同じことは、阪神・淡路地域から全国あるいは海外の被災地へ多くの人や団体が支援にかけつけて行なったさまざまな活動の中にも見られます。

③の事例は、「お返しするものが何もない」立場だけれども、自分たちの体験や現在の苦境そのものを「教材」として後学の方々に役立ててもらえば、という形の「お返し」です。現状はどうしようもない苦境にあるが、そのこと自体が「誰かの役に立っている」という事実。これが、生活再建への意欲や元気を少しでも取りもどすきっかけとなる。そういった感情の推移が引用文にはよく表れています。同様のことは、戦災、犯罪被害、闘病生活といった自らのつらい体験をみんなの前で語ったり記録に残したりする場合や、同じ苦境にある人に「先輩として」アドバイスする「セルフヘルプグループ」での人間関係にも見られます。

本節で述べたかったことは、「支援していただいた方にお返しをする」という形のリアクションが支援対象者の「負い目」を軽減し、生きる意欲やプライドを回復する術になる、という知見です。先に挙げた2つのニーズで言えば、「生存」のニーズはボランティアからの援助によってある程度満たすことができますが、もう一つの「尊厳」のニーズの充足にとっては、逆方向の「贈り物」、すなわち「お返し」や「お礼」といったリアクションが「相手に受け取られること」が鍵となっていると言えそうです。

5. 支援対象者からの「返礼」の受け取り方

しかし、ボランティア側がこうした「お礼」や「お返し」を当たり前と思ってはもちろんいけないわけで、それらはあくまで結果的についてきた「余得」として考えるべきでしょう。厳しい状況の中での「お返し」や「お礼」は、なけなしのリソースの中から差し出されたものであるわけですから。

この点について、木原は次のように述べています。「これまでは担い手側といえば、いかに上手に相手にサービスを提供するか、ということばかりが頭にあるが、それに加えて、相手（つまり受け手側）から、いかに上手に『いただくか』ということも、頭の隅に入れておかねばならないのだ」（木原2005：100）。つまり、ボランティアの側から率先して、相手への配慮を伴った「上手な受け取り方」ができるようになれば、両者の関係をいっそうフラットなものにすることができます。資料3では、ボランティアに関する記録や手記の中から筆者が「これはうまいな」と思った表現や立ち振る舞いの例を紹介します。

資料3 支援対象者からの「返礼」の上手な受け取り方の例

①ボランティアにとって、対象者からの「感謝」とは？

「避難所のボランティアの方が言っていた。『感謝してほしいと思ったことは一度もないが、感謝してくださると元気が出ます』と。町に出て、3歳の息子が県外からの応援のゴミ収集

車に足を止めて手を振った。笑って手を振り返してくれたあの人に、私たちの気持ちが伝わったろうか。」(阪神大震災を記録しつづける会編1997:208)

②お礼として金品を受け取ったとき ――「みんなでいただく」

「Q 被災者にお礼(お金)をもらってしまいました。どうすればよいですか。

A 被災者から差し出されたお礼をもらう、もらわないについての決まりはありません。しかし、『ボランティアですので』と言って辞退するのが望ましいでしょう。それでも熱心に受け取ってほしいといわれたら、ありがたくいただいてください。ただし、いただいたものを一人で使うのではなく、できるだけ多くのボランティアで使うようにしたいものです。」(伊永1998:104)

③断られてしまった支援のリサイクル ――「じゃ、こっちへ行こう」

「阪神大震災のとき、長男が神戸の東灘区で被害にあいました。夫が父親として、『ボランティアで手助けに行く』と言ったときに、息子が『気持ちはうれしいけど、父さんが来てくれてもどうにかなるっていうもんじゃないから、大丈夫だから』と言って断られました。夫が息子から断られてがっかりしておりましたところ、新聞で、タイでボランティアを募集しているとあって、『じゃ、こっちへ行こう』ということになりました。仕事はタイの農村部に井戸を掘る学校をつくる仕事です。…旅費、滞在費は自腹。期間は三週間。私は断った長男とともに応援しております」(永2000:20-21)

①の避難所ボランティアの方の言葉には、「お礼の言葉はあくまで余得である」という意味合いが、実にスマートな形で表現されているように思います。②の「お礼としていただいたものは、みんなで分け合う」というのもいい。何とか「お返し」がしたいという被災者の気持ち、お金やモノを受け取るのは忍びないというボランティアの気持ちの両方が生かされ、しかもその善意の品がさらに「別の誰か」や「みんな」のために使われる、という実に見事な「妙手」です。

③のケースは応用編です。ボランティアが提供できる内容と対象者の側のニーズがずれるというのはよくあることです。とはいえ、断られたボランティアは落ち込むし、断る方もそれが分かっているのでなおさら断りづらい。結果的にお互いの善意の「すれ違い」がどんどんとエスカレートしていく現象についてはすでに見ました。

どうも日本人は「善意を断る」ことが総じて苦手なようで、どうしても“No, I’m sorry.”という応答になりやすい。断る方は「(せっかくのご好意を) すみません」、断られる方も「(よけいなおせっかいをしまして) すみません」と謝ってばかりになりがちです。それに対して、英語には“No, thank you.”という絶妙な表現があって、「こちらは間に合っているので結

構です。善意をありがとう」というスマートな断りを、この短い一言で済ますことができます。③の例は、永六輔氏がボランティアの側の「うまい断られ方」として紹介したのですが、このお父さんのように、断られてもめげずに、「では余った贈り物は別の現場に振り分けますね」と軽やかに処してくれれば、断る側の肩の荷もずいぶん軽くなるに違いありません。

6. 「困った人ほどボランティア」——「自立支援」への展開

最後に、「お返しをしたいけれどもできない」ような人たちが、自分にできることで日ごろの「お返しをする」ことを支えるのもボランティアである、という発想を紹介したいと思います。先に触れたように、未復興被災者や疾病あるいは高齢化によって介護が必須となった人たちの中に、「こんな状況ではお返ししたくてもできない」という嘆きや、「こんな自分にも何かできることはないだろうか、できるならボランティアしたい」という気持ちをもつ人が少なくないと思います。このような「助ける側にまわってみたい」「何か人の役に立ちたい」と思っている人々を支援するというのもボランティア活動の大切なテーマの一つであって、「弱者救済」から「自立支援」へという一歩進んだ活動へと展開する際の契機にもなります。

木原孝久は、今まで助けられる側にあった人（＝お礼を言うばかりの人）が、助ける側（＝お礼を言われる立場）にまわることがその人の生きる力を増幅し、心身の健康を著しく回復させる効果があるとして、この現象を「ボランティア・セラピー」（木原2005：2）と表現し、福祉現場でのそのような取り組みを推奨しています（資料4の①）。阪神・淡路大震災の被災地でも、今までろくにお返しもできずに「負い目」を感じていた被災者が自ら何かをすることで自信を取りもどすことができた、そしてそれをボランティアや市民活動団体が支えていった例があります（②と③）。

資料4 「困った人ほどボランティア」および「自立支援」の例

①福祉現場での「困った人ほどボランティア」の例（木原2005より）

- ・在宅で寝たきりの高齢者が、近隣の人たちを枕元に集めて「寝たきりになったらどんな生活になるのか見せてあげます」ボランティアをしている。
- ・大学の福祉関連授業の一環で、寝たきり高齢者のビデオを撮ろうということになり、認知症で寝たきりの方の清拭から入浴など、すべてを撮らせていただいた。モデルの協力のお礼にと薄謝を包んだら、「ワシのような体がお役に立つなんて」と感激していたという。
- ・三人の筋ジストロフィーの子を持つお母さん。「子どもに友達がほしい」と思いボランティアを募集するも、入れ替わりで次々と若いボランティアたちがやって来て、一人ひとりの性格や好みを配慮しながら受け入れるのに気疲れがしてきた。著者が、「わが家はボランティアセンターで、あなたはその所長。自分が彼らを育て、コーディネートしていると考

えてはどうですか」とアドバイス。後日に、「だいぶ気持ちが楽になりました」とのこと。

②被災者による起業の支援（コミュニティ・サポートセンター神戸）（岩崎2000、西山2005）

長期にわたって支援を受けてきた被災者の人たちの「何ができるか」「何がしたいか」といった意向を把握し、それを元に有償サービスとして事業化する過程を支援。お金を生み出す事業に関わることが社会的承認の証となり、長らく支援される立場にあった人たちの自信の糧になる。

③「まけないぞう」事業、「一本のタオル」運動（被災地 NGO 協働センター）

（村井2001、西山2005）

被災地の市民団体の呼びかけで全国から被災地に送られてきたタオルを、被災地域の人たちがゾウの形に加工して販売。経済的に自立とまではいかないが、全国の購入者からの「勇気もらった」「ありがとう」といったメッセージに、製作者が「人の役に立てた」「自分も人に認められた」と感動。

7. 「成熟したボランティア」に向けて —— 「もちつ・もたれつ」のススメ

本稿では、「いかにして見知らぬ他者のニーズに応えるか」という現代社会における重要課題についての「ボランティア」の可能性と課題について論じてきました。阪神・淡路大震災で証明されたように、（うまく条件がはまれば）ボランティアという名の下に、見知らぬ人どうしがお互いのニーズを満たしていくような、一時的だが「濃密な」人間関係を作り出すことができる。これがボランティア活動の最大の「魅力」です。しかし、ボランティアの側が「いいことだからガンガンやろう」という素朴な気持ちで突っ走ると、たちまち相手との不均衡な関係ができてしまうという「危うさ」も秘めています。では、ボランティアと支援対象者の関係の目指すところとしてどのあたりに目標を置けばよいのでしょうか。永六輔氏は「成熟したボランティア」について次のように指摘しています。

「ボランティアには、される側の気持ちというものがあります。たとえば、恥ずかしいとか、照れくさいとか、さらにいえば、よけいな世話ということもあるんです。…せっかくの好意で来てくれる人に対し、被災地では、『いまあなたがしていることは、よけいな世話ですよ』とは言えない。善意の行為には注文がつけにくい。だから、それはボランティアをするほうで感じ取らなければいけないことです。自分がやっていることに陶醉してしまうと、周囲のこと、とりわけ、されている相手のことがおろそかになってしまう。もう少し、余裕と相手に対する状況判断というものが加わった、成熟したボランティアであってほしいものです。」（永2000：29、傍点引用者）

もちろんいくら気をつけていても、「ボランティアをされる側」の気持ちに寄り添うというのは、そう簡単なことではありません。仮に支援内容に対して「ありがとう」と言われたとしても、本当にニーズがマッチしての「ありがとう」なのか、それとも（ニーズとは違ったけれども）心遣いに感謝しますといった儀礼的な返礼なのかの見極めは困難です。とはいえ、当面においてできそうなことは、お互いの「心の貸借対照表」がいびつに偏ってはいないか、自分の方が「贈りっぱなし」に、相手が「お礼の言っぱなし」になっていないかを日ごろから気をつけておくということではないでしょうか。人間、「もちつ・もたれつ」であり、「困った時はお互い様」なのですから。

「ボランティアとはかくあるべし」といったことを難しく考えるとキリがありませんし、やりすぎると一歩も足を踏み出すことができなくなります。ですから、とりあえずは「お手本」となる好例や、現場で蓄積されたさまざまな「知恵」を参考にさせていただきながら、自分の言動や立ち振る舞いを時々はふりかえてみるのが大切である、このあたりを本稿の暫定的な結論としておきたいと思います。

（付記）本稿は、「震災10年市民検証研究会」（2004～5）、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト「被災地における共生社会の構築」（グループリーダー：岩崎信彦神戸大学名誉教授、2003～8）、および「連携市民大学準備会（世話人会）」（2008～）等に筆者が参加した先々で、ボランティアや市民活動の現場について見聞きしていく中で着想を得たものです。特に、被災地 NGO 協働センターの村井雅清さんと細川裕子さん、神戸大学震災救援隊の藤室玲治さんからは、ボランティア活動にまつわるさまざまなエピソードについてご教示いただきました。心より御礼を申し上げます。

（注）本稿の内容の一部、特に震災ボランティア関連の箇所は、徳田剛著「よそ者の社会学——近さと遠さのダイナミズム」（神戸大学博士学位論文、2007）の第7章『『被災地発ボランティア文化』の形成と発信——『困ったときはお互いさま』の思想から』での論考が元になっています。

（参考文献）

- 永六輔，2000，『「無償」の仕事』，講談社α新書
藤田正，1996，『私論 被災者の心理』，ナカニシヤ書店
福岡正行編著，1996，『できることからボランティア』，郁朋社
原田隆司，2000，『ボランティアという人間関係』，世界思想社
——，2005，「ボランティアとコントロール」，宝月誠・進藤雄三『社会的コントロールの現在』，世界思想社，pp.397-412
阪神大震災を記録しつづける会編，1997，『まだ遠い春——阪神大震災3年目の報告』，阪神大震災を記録しつづける会発行
Ignatieff, M., 1984, *The Needs of Strangers*, London: Vintage (=1999, 添谷育志・金田耕一訳『ニーズ・オブ・ストレンジャーズ』，風行社)
伊永勉，1998，『災害ボランティア読本』，小学館

- 岩崎信彦, 2002, 『現代社会における「災害文化」形成についての方法論的研究』, 平成13年度神戸大学
教育・研究重点支援経費 研究成果報告書
- 金子郁容, 1992, 『ボランティア もうひとつの情報社会』, 岩波新書 235, 岩波書店
- 木原孝久, 2005, 『ボランティア・セラピー 要介護者の力が活きる福祉のカタチ』 中央法規出版
- 草地賢一・松本憲一郎, 2001, 「対談 ボランティア精神を語る」, 『草地賢一さんの仕事』 刊行委員会編,
『阪神大震災と国際ボランティア論 草地賢一の歩んだ道』, 遊文舎, pp.97-140
- 村井雅清, 2000, 「阪神・淡路大震災から生まれた『まけないぞう事業』から考察するボランティア」
『ボランティア学研究』 vol.1, pp.75-85
- 中山淳雄, 2007, 『ボランティア社会の誕生』 三重大学出版会
- 西山志保, 2005, 『ボランティア活動の論理 ―― 阪神・淡路大震災からサブシステンス社会へ』, 東信堂
- 岡崎宏樹, 2005, 「贈与としてのボランティア」『ボランティア学習研究』 第6号, pp.21-25
- 戸高真弓美編著, 1995, 『大震災ボランティア』, 朝日新聞社
- 山口一史, 2004, 「阪神・淡路大震災の10年をボランティア活動にみる」, 『ボランティア学研究』 vol.5,
pp.3-4
- 山下祐介・菅磨志保, 2002, 『震災ボランティアの社会学』, ミネルヴァ書房